

品田悦一著『万葉集の発明』

国民国家と文化装置としての古典

岩下 武彦

著者の最初の論著である本書は、「はじめに」「第一章 天皇から庶民まで」「万葉集」の国民歌集化をめぐる問題系、「第二章 千年と百年—和歌の詩歌化と国民化」「第三章 民族の源郷—国民歌集の刷新と普及」「おわりに」の各章からなり、『国民歌集』としての『万葉集』という觀念が、近代国民国家によって如何に発明され、改良され、普及し、『国民』の一体感を演出する上で如何なる役割を果たしたか、また、現代まで如何に生き延び、如何に機能しているか、を確かめようとする。

あくまで実証的な態度に徹し、近代国民国家による「伝統の発明」の一環としての『万葉集』の発明を跡づける。その作業を通して、明治中期までの「国民詩」樹立の運動を承けた子規の『万葉集』「発見」を捉え

直し、子規一門による「国民歌集」としての『万葉集』の「発明」と普及が、近代国家の統一イデオロギーとしての「民族」「国民」の形成と、官学アカデミズムによる近代国文学研究の確立と、近代出版文化の成立、「国民」の人格形成を目指した国語教育制度の確立等々、近代国家の成立と不可分に関わりつつ、押し進められてゆく様子が動態として捉えられている。

「古代の国民の真実の声があらゆる階層にわたって汲み上げられている」という側面と、「貴族の歌々と民衆の歌々が同一の民族的基盤に根ざしている」という側面とからなる、『万葉国民歌集観』（二三—二四頁）は、古典

教育を通して「言説として教室に持ち込まれ、社会の中核を担うべき次世代の頭脳に注ぎ込まれていった……事態は歌々を読んだり

味わったりする経験とは別の次元で、しかもそうした経験に先立って成立した」（一七八頁）のだけという。

従来、万葉集の研究・享受史という観点からでは、このような見方は出てこないだろう。「私は……なぜ『万葉集』を読んでいるのだろうか」（二八頁）という問を、「『万葉集』を読む」という、自らの日常の営為そのものを対象化し捉え直すところから出発すること、本書は独自の見地を切り拓いている。

本書と向き合うには、読者が自ら著者の問を、著者と同じレベルで問う他ないであろう。事は、我々自身の育った基盤である近代とどう向き合うか、に関わる。今日我々の置かれている状況は、まさにそのことを我々に課している。本書はそういう課題に対する最初の取り組みであり、問題の方向を指し示している。

（二〇〇一年二月十五日 四六判三五六頁）

定価三、二〇〇円 新曜社

（いわした たけひろ 中央大学教授）